

「ルシ」再考 Rethinking Rus'

福嶋 千穂

FUKUSHIMA Chiho

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

はじめに

1. 「ルシ」が指すもの：語源と、対象の拡大
 2. 多色のルシと大小のルシ
 3. ポーランドとルシ
 4. ウクライナ・ルシ
 5. カルパチアのルシン：第四のルシ？
 6. 「全ルシ」の教会
 7. 「歴史的ポーランド」と「ルシ世界／全ルシ」の相克
 8. 西ルシ主義とルソフィリズム
 9. 歴史叙述にみる用語の問題：ロシア語、英語、日本語での表記の問題
- おわりに

キーワード：ルシ、ロシア、ポーランド、ベラルーシ、ウクライナ、ルテニア

Keywords： Rus', Russia, Poland, Belarus, Ukraine, Ruthenia

【要旨】

本稿は「ルシ」と呼ばれてきた地域—中近世にはポーランド・リトアニア、そして 19 世紀を通じてロシア（一部はオーストリア）の支配下に置かれ、20 世紀になってベラルーシ、ウクライナという国家を生んだ地域—について、「ルシ」という名称の定義・含意がどのように変遷してきたかを概観しつつ考察する。「ルシ」という語は元来ノルマン系のキエフ・ルシ支配階層のみを指したが、それが指す対象は拡大し、さらにさまざまな派生的表現を生んできた。本稿では特にポーランド史とロシア史の文脈における「ルシ」の相違に着目する。またそのことに関連して、ロシア語・英語・日本語におけるポーランド・リトアニア領のルシ地域の表記について問題を提起し、それぞれの言語での表記にみられる問題点とそれらを解決するための試みについても言及する。



This paper is dedicated to give a consideration to the historical region named “Rus”- which had been dominated by the Early Modern Polish-Lithuanian Commonwealth, then by the Russian and Austrian Empires, and eventually given birth to today’s Belarus and Ukraine. The special attentions are directed to the process, how the meanings and connotations of the word “Rus” have changed and developed. This paper particularly concentrates on the difference between what “Rus” connotes in the Polish & Russian historical contexts. And in relation with this, serious terminological problems in describing Early Modern Russian lands, which comprised the Polish-Lithuanian Commonwealth, are to be pointed out.

はじめに

日本において「ルシ」という語は、何よりもまず、ロシアの前身として想起されるであろう。ロシアの歴史叙述が紹介される過程で、すなわちロシアとの繋がりにおいて、「ルシ」は日本に知られるようになったからである。

「ルースキー・ミール *Русский мир*」という言葉が現在もロシア・メディアに登場するが、2013年秋から2014年にかけての「ユーロマイダン」、そしてロシアによるクリミア半島併合によってロシアとウクライナとの関係が悪化してからは顕著に使われるようになった。この「ルースキー・ミール（以下、ルシ世界）」は「ロシア世界」と訳してはならない。「ルシ世界」¹⁾は、今日のロシア連邦の国境を越えさらに西のほうに広がる地域をも包摂する。東スラヴの全域に適用される一方で、ロシアの非東スラヴ系市民は本来含まない。

ルシ世界の概念は、実体をとまうのかどうかはさておき、ロシアの人びとには時代を超えて受け入れられてきた。ロシア帝国の時代から、「全ルシのナロード *Общерусский народ*」[Radzik 2016 : 11-13, 115-124]として国家イデオロギーや公定の歴史叙述が確立してきたアイデンティティの拠りどころなのである。ルシ世界はまた、正教会組織が用いてきた「全ルシ *Всея Русь*」の観念と不可分の関係にある。

本稿では、「ルシ」の語の含意するところ、それが歴史的にどのような対象に向けられてきたかについて整理し、また歴史叙述の際に注意すべき表記上の問題について考察したい。

1. 「ルシ」が指すもの：語源と、対象の拡大

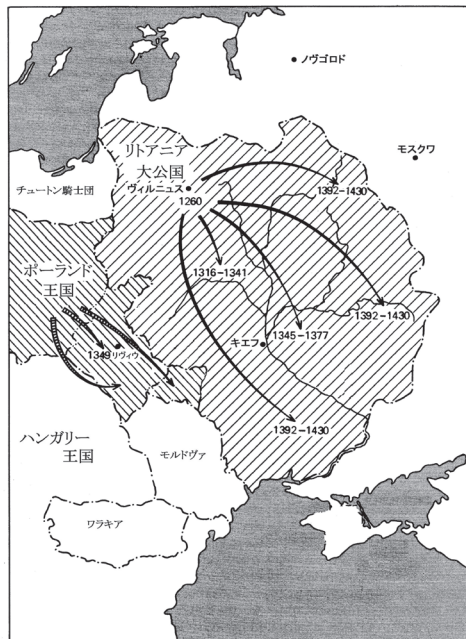
まず「ルシ」がそもそも何を意味するのかについて、確認しておこう²⁾。

「ルシ」とは、フィン語系のひとびとがノルマン人と呼んだ名であった。水脈を伝ってスラヴ人居住圏に南下してきたノルマン人(ヴァリャーギ)を指した「ルシ」は、当初はもっぱらリューリク族を筆頭とするキエフ公国のノルマン系統治階層を意味したが、時が経つととも

にスラヴ系の被支配民に拡大適用されるようになった。やがてキエフ公国そのものを意味するようになった「ルシ」は、ヤロスラフ賢公没 (1054 年) 後には、分領公国すべてに適用されるようになった。すなわち、西南のハリチ、ヴォルィン、北東のロストフ、スズダリ、西北のピンスク、トゥロフ、ポロツク等々、さらにノルマン人がキエフ国家に先立って建国しキエフ国家からは独立していた北方のノヴゴロドをも含む、広大な領域を「ルシ」は包摂していった (地図 1)。



(地図 1) 一一世紀中頃から一二世紀中頃の古ルシ (ルシ諸公国) (典拠: 下斗米伸夫 (編著) 『ロシアの歴史を知るための 50 章』 明石書店, 2016 年, 26 頁)



(地図 2) ポーランド王国とリトアニア大公国のルシ進出 (典拠: Orest Subtelny, *Ukraine: A History*, 2nd ed., 1994, p.71)

こうした「ルシ」概念の拡大は、ついにはリトアニア大公国にも及ぶ。異教を奉じるバルト語系のリトアニア人が築いたリトアニア大公国は、モンゴル侵攻を受けて瓦解したルシ諸公国の領土を支配下に置くようになると、ルシ系(すなわちバルト系ではなくスラヴ系)が人口においてリトアニア人を凌駕するようになった(地図2)。リトアニア大公国ではさらに、キリスト教諸国との盛んな交流の賜物でもあったより高度なルシの文化が優位にたち、キリル文字を使うルシ語が公用されるようになった。このことから、リトアニア大公国は「リトアニア・ルシ」とも呼ばれた³⁾。

要約すると、「ルシ」とは、本来はノルマン系の人びとを指す語であったのが、意味する対象が拡大し、空間的には、今日のヨーロッパ・ロシア、ベラルーシ、ウクライナを包含した。キエフ・ルシに自らのルーツを求め、東方キリスト教文化とキリル文字を受け継ぐ東スラヴの諸民族がその空間の住人である。

この広義の「ルシ」が、前述したように、何よりもまずロシアの前身として認知される傾向は(おそらく日本に限られたことではない)、ロシアのプレゼンスの高さと、ロシアが他のルシ諸ネーション(ベラルーシ、ウクライナ)を歴史的に従属させてきたことに起因する。

2. 多色のルシと大小のルシ

元来キエフを中心とするドニプロ流域ウクライナに限られた地理的概念としてのルシが大きく膨らむにつれ、興味深い現象が現れた。ルシの各地が様々な色を帯びて呼ばれるようになったのである。「白ルシ」(現在のベラルーシの主要部分)、「黒ルシ」(現在のベラルーシ西部)⁴⁾そして「赤ルシ」(現在のポーランド東南部からウクライナ西部にかけて)が知られる。

これらの色が何を意味したのかについては、様々な説明が試みられてきた。

「白ルシ」の語源には、とりわけ大きな関心が寄せられてきた。ベラルーシのナショナリストたちは「白」を「清浄」や「純血」の象徴と解釈し、「タタール=モンゴルに征服されなかった」(=民族的に純血な)ルシであると説明した。事実、ベラルーシの地はモンゴルの来襲を被りはしたものの継続的な支配は受けなかった。しかしこの説明では「赤ルシ」や「黒ルシ」については明らかにならない。

一方、「白」「赤」「黒」すべてを説明するのが東洋の五行説に由来を求める仮説であり、色が方位を象徴するという立場をとる【伊東、井内、中井(編)1998:110】。五行説では中心を金(黄)とし、北を黒、南を赤、東を青、西を白と見立てるが、「黒ルシ」「赤ルシ」「白ルシ」の立地が、キエフからみてそれぞれ北、南、西に、厳密に相当するのではないにせよ、大きく外れてもいない。東洋における方位と色との関連付けが東方からの遊牧民によってルシの地に伝えられたというのは有力な仮説とみてよいだろう⁵⁾。

これらの色付きのルシの呼称のうち、「白ルシ」だけが生き延び、現在は一国の公式名称(ベラルーシ)となっており、「赤ルシ」「黒ルシ」は歴史的地名として記録と記憶に残るばかりである⁶⁾。

もうひとつ、古代からの呼び名で、その後ロシア帝国において使われたのが、「大ルシ(大ロシアとも)」、「小ルシ(小ロシア)」の区分である。ロシア帝国ではこの「大ルシ」「小ルシ」そして「白ルシ」が、ルシの三構成要素と認識された⁷⁾。「大ルシ」「小ルシ」はそれぞれロシアとウクライナ⁸⁾、そして「白ルシ」がベラルーシである。

この命名は古代地中海世界での慣習に則っている。「小」は「本来の」「狭義の」「より近くの」といった意味合いを含み、「大」は「より遠い」ことを意味する。ウクライナが「小ルシ」、ロシアが「大ルシ」と呼ばれた(ギリシア語ではそれぞれ「ミクラ・ロシア」「メガラ・ロシア」、ラテン語では「ルス・ミノル」「ルス・マヨル」)のは、元来はキエフ一帯こそがルシであったことを考えれば正しい。しかしながらこの「大」と「小」は、ロシア帝国においては異なるニュアンスを添えられた。「大ルシ」こそがルシの基幹部分であると考えられ、「小ルシ」そして「白ルシ」は、その変種と見なされた。

カッペラーの指摘したように、ベラルーシやウクライナはロシア民族のヴァリエーションと考えられたことから、ロシア帝国において(他の民族集団のように)差別対象とはならなかったが、逆に「大ルシ」への同化をうながす圧力を最も強く被った [Kappeler 2003]。

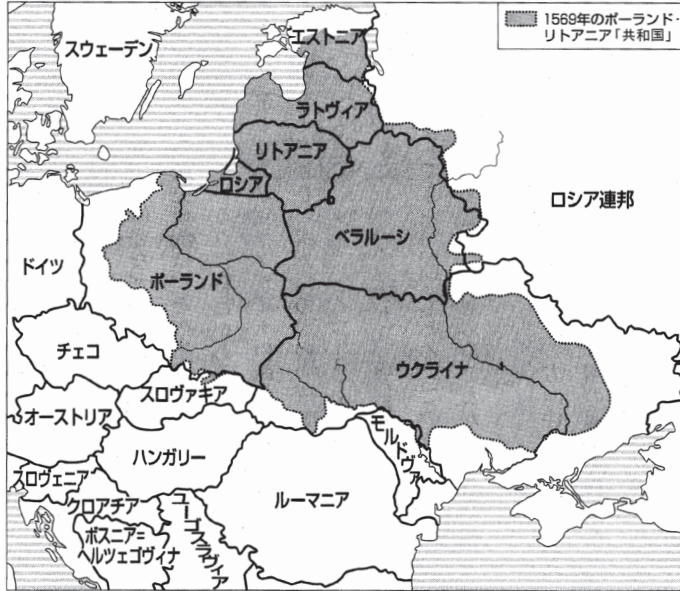
「白ルシ」や「小ルシ」が「大ルシ」の地域的ヴァリエーションであって素朴な農村風景を彩るユニークで魅力的な土着文化を体現する分には問題はなかった。しかし「白ルシ」や「小ルシ」の背後にロシア国内で最大の敵性民族であることが露呈したポーランドの影がちらつくと、帝国側は「白ルシ」や「小ルシ」を「脱ポーランド化」させる必要に駆られ、「白ルシ」や「小ルシ」の農民を「大ルシ」へと一体化させるための政策を施行した。

3. ポーランドとルシ

ここで、ロシア帝国において最も忠誠心を疑われた民族、ルシ世界の西隣にあり、中近世にはリトアニアとともにベラルーシ、ウクライナを領有し、ポーランド分割後にもこれらの地の支配的民族であったポーランドに目を向けたい。

14世紀にポーランド王国がハンガリー王国との競争に勝ち最初に手に入れたルシ地域は、いわゆる「赤ルシ」であった。キエフ・ルシ分領化ののちにハリチ公国が領有したところである。ポーランドは「赤ルシ」を行政単位「ルシ県」へと編成し、ポーランドでは「ルシ」は狭義では(ルシの西端である)「赤ルシ」を指すようになった。一方、本来の「ルシ」であるキエフ周辺は「ウクライナ」(「辺境」を意味)と呼ばれた。16世紀後半にリトアニアとの合同によって「共

和国」を形成したポーランド（地図3）はキエフを領有するようになるが、モンゴル侵攻による荒廃からの復興が芳しくなかったキエフ一帯はいよいよ僻地と化していたのである⁹⁾。



（地図3）一五六九年当時のポーランド・リトアニア「共和国」の領域と一九九九年の同地域
 （典拠：谷川稔（編）『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』山川出版社、二〇〇三年、一七九頁）

ポーランドとロシアで見解が大きく異なったのは、「ルシ」が広義ではモスクワ国家を包摂したかどうかという点に関してである。ロシアが自らをルシの嫡流と位置づけたのに対し、ポーランドでは伝統的に、モスクワ国家はルシから排除され、ルシの篡奪者とみられた¹⁰⁾。

ポーランドにおいて、「ルシ」はたとえ広義においても、自国の国境外には適用されなかった。ともに連合を構成したリトアニア大公国領の東スラヴ圏までもがしばしばルシから除外される（リトアニア大公国の領域は、ルシ地域をも含めてリトアニア *Litwa* と総称される）。近世のポーランドにおける「ルシ」の定義は、狭義では「ルシ県」（赤ルシ）、広義ではポーランド・リトアニア「共和国」支配下の東スラヴ、そして両方の中間的な定義が、ポーランド王国領に含まれる東スラヴであった。ルシは、あくまでも自分たちのうちに内在するものとして認識された。

この、ポーランドにおいてオクシデント化された「ルシ」は、ウクライナ・コサックによって再オリエント化される。そのことはポーランドとコサック・エリートとの協定である「ハジャチ合意」（1658年）[福嶋2010]にうかがわれる。「ハジャチ合意」は、「共和国」第三の構成要素としての「ルシ公国」を構想するものだが、そこに提示される「ルシ公国」の範囲は、キエフを中心とするドニプロ流域の「ウクライナ」と呼ばれた地域であり、より西に位置するヴォルィン、ポドレ、ルシの諸県、そしてリトアニア大公国内のルシ地域は含まない（地図4）。「ルシ公国」は包摂的なルシではなく、あくまでもコサックの勢力圏に限定されたコサック国家だったので

ある。ポーランドにとっての狭義のルシである「ホルシ」(ルシ県)と重なることのないルシ―「ハジャチ合意」において「ルシ」概念は明らかに東に引き戻されている。



(地図 4) 17 世紀後半のポーランド・リトアニア「共和国」

(典拠：Adam Zamoyski, *Poland, A History*, William Collins paperback, 2015, p.150)

「ハジャチ合意」はポーランドの議会で批准されたものの実現には至らず、「ルシ公国」の領域に想定されていた地域の大半(キエフを含む)は、ポーランドとモスクワとの講和「アンドルソヴォ協定」(1667 年)によってモスクワに割譲され¹¹⁾、やがてロシア帝国で「小ルシ」と呼ばれる。

4. ウクライナ・ルシ

もともとルシの中核であったキエフとその周辺が「ウクライナ」と呼ばれるようになったのは奇妙なことにも思われるが、早くも 12 世紀にはキエフ・ルシの南端(ペレヤスラフあたり)を「ウクライナ」と呼ぶ例が確認され、定住農耕民の世界と遊牧騎馬民族の世界との境界域と認識されていたことを示している(『原初年代記』)¹²⁾。

ポーランド・リトアニアにおいても、キエフ地方を指すことばとして「ウクライナ」が用いられた。この地域は実際にポーランド・リトアニア「共和国」の東の境界を成していた。ただし「ウクライナ」が公式名称であったことは一度もなく、ドニプロ沿岸のキエフ県(ときに隣接するブラツラフ県とチェルニゴフ県もまとめて)がそのように通称されたにすぎない¹³⁾。

ネイション形成期に入ったウクライナ人が(ロシア帝国での公式呼称である「小ルシ」ではなく)「ウクライナ」を自らのネイション名に採用したことは、歴史家にして中央ラーダ政府¹⁴⁾の

大統領でもあったミハイロ・フルシェフスキーに負うところも大きい。フルシェフスキーの著した大作『ウクライナ・ルシの歴史』が国民史として大きな権威を持ったのである¹⁵⁾。このウクライナ・ネーションは「小ルシ」の人びとに加え、同じロシア領のいわゆる「右岸ウクライナ」、さらにはオーストリア領ガリツィアのウクライナ人までも包摂した。コサックの時代に再オリエンタ化された「ルシ」が「ウクライナ」と一体化し（ウクライナ・ルシ）、その「ウクライナ」が「赤ルシ」を吸収するに至ったのである。

5. カルパチアのルシン：第四のルシ？

さて「ルシ」の射程はどこまで広がるのだろうか。現在、ロシア（大ルシ）、ベラルーシ（白ルシ）、ウクライナ（小ルシ、ウクライナ・ルシ）という三つの、ルシを名乗るネーションが存在するが、これにさらに加わらんとするのが、「カルパト＝ルシン」と称される人々である。

ハプスブルク君主国において、東スラヴの人びとはルシン人またはルテニア人（スラヴ語では Rusyn または Rusin、ドイツ語で Ruthenisch）と呼ばれ、大部分はガリツィア（一部は上ハンガリー）に居住していた。ルシン人の大多数は、ナショナリズムの時代を迎えて民族集団として「覚醒」すると、やがてドニプロ沿岸のウクライナ・ナショナリズムに融合していった。一方、「ウクライナ人」となった彼らをよそに、あくまでもルシンを自称し続けた人びとが、カルパチア山地にはいた。

山地の人びとは、「小ルシ」生まれのウクライナ・ナショナリズムに合流するガリツィアのウクライナ人には同調せず、その結果ウクライナ人に同化することはなかった。彼らは今日も「ルシン（またはカルパト＝ルシン）」を名乗り、いくつかのサブ・グループに分かれ、複数の国家に分断されつつカルパチア山地で独自のアイデンティティを守っている¹⁶⁾。

ルシンの人びとは、ハリチ公国とハンガリー王国、ポーランド王国の境界域に居住したケルト・ヴラフ・スラヴ混成の集団で、言語的にはスラヴ化されてはいるものの元々のルーツは（ノルマン起源の支配階層とスラヴ系先住民から成る）「ルシ」とは異質であった。にもかかわらず、スラヴ語典礼をおこなう東方教会に属したことからいつしかルシと同一視され、ハプスブルク君主国において言語的にも文化的にも（近いながらも）同一ではないウクライナ人と同じ集団「ルテニア人／ルシン」に数えられたのは、同じ合同教会（東方カトリック）の教会組織に属していたためである。ルシンの人びとからも、自らを第四のルシ・ナショナリティと主張する声があがっている [Kuzio 2014 : 279-287]。

6. 「全ルシ」の教会

カルパト＝ルシンのアイデンティティ問題にみられるように、同じ教会に属することで培われ

る共同体意識というのは重要な意味を持った。

「ルシ」概念の発展と密接な関係にあったのが正教会である。「ルシ世界」に先立つ概念であり、やがてルシ世界とほぼ等号で結ばれる「全ルシ *Вся Русь*」の観念は、キエフ府主教座正教会の歴史と大きく関わっている。「全ルシ」という言い回しは、キエフ・ルシの分領公国化にともなってあらわれたとされる。各地に形成され、土地ごとに特色を持つ諸公国をひとつに束ねる、求心力のある言葉として必要とされたのである。ロストフ、スズダリ、ヴラジーミル、さらにノヴゴロドといった、かつてのキエフ公国の領域に含まれなかった地域の諸公国もが、「全ルシ」の教会すなわちキエフ府主教座教会には属したのだ。

モンゴル侵攻を契機にルシ諸公国のゆるやかなまとまりは崩壊したかにみえた。ルシの中心キエフは破壊され、北方の諸公国はモンゴルの間接統治下に、西方・南方の諸公国はリトアニアとポーランドの支配下に入る。唯一、そのような分断のもとで「全ルシ」を体現しえたのが、多分に象徴的ではあったものの、正教会であった。

ルシの正教会の首座はキエフにあり、キエフ府主教を名乗ったが、やがて「全ルシ」または「キエフと全ルシ」の府主教と名を変えた。正教会もやはりモンゴル侵攻の影響を受けずにはいられず、府主教は 13 世紀末より、モンゴルによって壊滅的被害を被ったキエフから北方へと拠点を移すようになり、15 世紀の後半からその称号を正式に「モスクワと全ルシの府主教」とした。一方、南西のルシ地域を領有するようになったリトアニアとポーランドの君主も自国内のルシ地域に正教会の府主教座を確保しようとし、別途キエフ府主教座が興された [Plokhy 2006: 101-105]。

南のキエフ府主教座はポーランド・リトアニア内の、北のモスクワ府主教座はモスクワ国家の正教徒を管轄した。前者がコンスタンティノーブル総主教の管轄下に残ったのに対し、後者は、オスマン帝国の支配下で困窮していたコンスタンティノーブル総主教座に対する金銭的援助の見返りに昇格を果たし、1589 年にモスクワ総主教座となった。

「アンドルソヴォ協定」によってキエフ市がポーランドからモスクワに割譲されたのにもない、キエフ府主教座もまたモスクワ国家のもとに入った。1686 年には、コンスタンティノーブル総主教座からモスクワ総主教座へと正式に移管された。モンゴル侵攻を契機に南北に分岐したルシの正教会がモスクワ国家の庇護下で一つになったのである。

のちにロシア帝国は、ポーランド分割によってベラルーシとウクライナを「ポーランドのくびき」から解放し「ルシ世界」を再編するのだが、教会組織を統合し「全ルシ」を名実のものとするのがルシ世界の確立への布石であった。

7. 「歴史的ポーランド」と「ルシ世界／全ルシ」の相克

「ルシ世界／全ルシ」を構成するベラルーシとウクライナは、中近世にはポーランド・リトアニアの支配下にあり、「歴史的ポーランド」をも構成している。

ポーランド民族の元来の居住域をはるかに超える広い領域を有した近世のポーランド・リトアニア国家は、「両国民の共和国 Rzeczpospolita Obojga Narodów」と呼ばれた。両国とはポーランド王国とリトアニア大公国のことで、それぞれがルシの地域と住民を内包していた（ポーランド王国内のルシが後のウクライナの、リトアニア大公国内のルシが後のベラルーシの原型である）。

ポーランド人が国家再興をかけてロシア帝国に反旗を翻した「一月蜂起」(1863年)の際、彼らは連邦としての「共和国」復興を訴え、「両国民の共和国」とどまらず「三国民の共和国」[Świątek 2013: 32-34] のイメージを掲げた。蜂起で使用された旗には三国民（ポーランド、リトアニア、ルシ）を象徴する紋章が配置されたが、ルシの紋章としてはキエフの守護者である大天使ミカエルの像が使われている（図表1）。ポーランドにとって歴史的に最も所縁の深い「赤ルシ」ではなくキエフが想定された理由は、一月蜂起がロシア領で勃発したところにあるだろう（リヴィウを中心とする「赤ルシ」は当時オーストリア領にあった）。また、17世紀の「ルシ公国」の構想が念頭に置かれてのことでもあろう。「ルシ公国」の領域は19世紀当時はロシア帝国内の「小ルシ」に相当した。一月蜂起における三国民のイメージはヤン・マテイコの絵画作品「ポロニア、1863年」(1864年)にもみられる。この中ではポーランド（ポロニア）、リトアニア、ルシがロシア憲兵から尋問を受ける三人の女性の姿で描かれる（図表2）[『レオナルド・ダ・ヴィンチ《白貂を抱く貴婦人》』2001: 154] [Świątek 2013: 127-129]。



(図表1) 一月蜂起(1863年)で用いられた旗のひとつ。聖母子像を囲んで、ポーランド(白鷲)、リトアニア(追撃する騎士)、ルシ(大天使ミカエル)の紋章が配置されている。ワルシャワ軍事博物館蔵(典拠:博物館ウェブサイト、<http://www.muzeumwp.pl/kalendarium/02-07/>、2017年5月31日閲覧)



(図表 2) ヤン・マテイコ画「ポロニア、1863 年」1864 年、油彩、カンヴァス。中央の黒衣の女性がポーランドの寓意であるポロニア。隣の白衣の女性がリトアニア、左下に倒れているのがルシを、それぞれ寓意する(リトアニアとルシを逆に解釈する研究者もいる)。チャルトリスキ美術館蔵

(典拠：Wikipedia(パブリックドメイン)、https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Rok_1863_Polonia.JPG、2017 年 5 月 31 日閲覧)

キエフは、ロシア帝国においては「全ルシ」「ルシ世界」の源として想起される母なる都である。そのキエフに対するポーランド側からのクレームは、不可分の「ルシ世界／全ルシ」に対する挑戦であった。ポーランドが三つの構成要素(ポーランド、リトアニア、ルシ)から成る「共和国」を標榜することは、同じく三つの構成要素(大ルシ、小ルシ、白ルシ)から成るルシ世界への侵食を意味した。蜂起を鎮圧したロシア帝国は蜂起参加者に対して厳罰で応えたのみならず、旧ポーランド・リトアニア領の(潜在的なポーランド国家の構成要素たる)ルシ地域からポーランドの影響を一掃する政策に着手する¹⁸⁾。

8. 西ルシ主義とルソフィリズム

旧ポーランド・リトアニア領ルシにおいて「ポーランドのくびき」が残した最大の痕跡は、農民の大部分が属していた合同教会であった。この教会は、16 世紀末にポーランド・リトアニア内にあったキエフ府主教座教会が、東方典礼と諸々の慣習の維持を条件にカトリック教会に帰一して成立した¹⁹⁾。これに対抗して 17 世紀前半には合同反対派も別にキエフ府主教座を構えるようになり、17 世紀後半にモスクワ総主教座に移管されたのは合同反対派のキエフ府

主教座であった。一方の合同教会は、(キエフの名を冠する)府主教座をノヴォグルデクやヴィルニユスに置き、ポーランド・リトアニアで地歩を固めた。

ロシア帝国はモスクワ総主教座教会を文字通り「全ルシ」の教会とすべく、正教会キエフ府主教座に続き、ポーランド分割後は合同教会までも統合の対象とした。カトリシズムに汚染されたルシの農民をロシア正教会に統合する試みは「再合同」と呼ばれた。

19世紀にベラルーシを主な舞台²⁰⁾として段階的に行われた合同教会の正教会への「再合同」は、ベラルーシでの「西ルシ主義 Западнорусизм」とも関わっていた。「再合同」を主導した主教ヨシフ・セマシコは、「西ルシ主義」のイデオログのひとりである歴史家ミハイル・コヤロヴィチと友人関係にあった。

「西ルシ主義」とは、ベラルーシの人びとをロシア・ネイションの西方の分流とみなす立場で、19世紀半ばに、在地の知識人が土地の人びとのあいだでルシへの帰属意識を高めようと掲げた【早坂2013:71-76】。「ルシ」と「ロシア」は本来同じではないことから、「西ルシ」とは「西方の(ロシアではなく)ルシの民族」という意味でも理解され、「西ルシ主義」は独自のベラルーシ史学の成立をうながすことにもなった。

当時ロシア帝国は、ウクライナに対しても同じく「脱ポーランド化」をはたらきかけていた。ロシア帝国に含まれた「小ルシ」はもちろんのこと、オーストリア領ガリツィアの「ルシン」までもがその射程内にあった。

19世紀半ばの東ガリツィアでは、ポーランド人とルシン人との間で反目が強まっていた。反ポーランド感情を高揚させたルシン人の間では、ポーランドの文化的影響を排し自らのルーツたる「ルシ」性への回帰を訴える「ルソフィリズム」が流行した。「ルソフィリズム」は内発的なものではあったが、ロシア帝国がこの動きに乗じて現地のルソフィルたちを指南していたとも指摘される²²⁾。

とはいえガリツィアの「ルソフィリズム」においても、「ルシ」と「ロシア」の区別は意味をなした。「ルシ」を、ロシアを指すのではなくより包括的なプロト・ネイションと理解する者もいれば(古ルシ主義的ルソフィリズム)、特にロシアを指すと捉える者もいた(モスコフィリズム)。こうした幅広い潮流であったガリツィアの「ルソフィリズム」において、最終的な勝利者は「ウクライノフィリズム」であった。「小ロシア」のウクライナ・ナショナリズムに共鳴したウクライノフィルたちはガリツィアの(山地住民をのぞく)ルシン人のウクライナ化の旗振り役となった。

9. 歴史叙述にみる用語の問題：ロシア語、英語、日本語での表記の問題

最後に、これまで確認してきたような「ルシ」という語の多義性に関わる問題として、歴史

叙述における表記について、ロシア語、英語、日本語の事例をもとに考えてみたい。

まず、ロシア語での表記にみられる問題を指摘しておく。

「ルシ」と「ロシア」の区別において、ロシア語を除くスラヴ諸語全般に問題はない。ポーランド語とウクライナ語を例にとると、「ルシ」の名詞—形容詞はそれぞれ *Ruś—ruski*、*Русь—руський*、「ロシア」は *Rosja—rosyjski*、*Росія—російський*、と明瞭である。しかしロシア語においては例外的に、このふたつはそれほどクリアには区別されない。

近世のポーランド・リトアニアについてロシア語で記述されるとき、そこに住む東スラヴの地、人びとや彼らの言語や文化は「ルースキー *русский*」と書かれる（「ルシの」を意味する）。一方で同時期のモスクワ国家の人びとも、通常は「モスクワ人 *москвитянин*」ではなく「ルースキー」と呼ばれる（「ロシアの」という意味）。「ルースキー」が何を指すのかは文脈から推しはかることができるとはいえ、異なるものに対して同じ語を当てることには不明瞭さがつきまとう²³⁾。

実際のところ、ロシア語においても他のスラヴ諸語と同様、「ルシ *Русь*」と「ロシア *Россия*」にはそれぞれ固有の形容詞がある。「ルシ」の場合は「ルースキー *русский*」、「ロシア」の場合は「ロシースキー *росийский*」である。にもかかわらずロシア語では、「ルースキー」が「ロシースキー」に代用される。「ロシースキー」または「ロシヤニン」(ロシア人)という表現は、ルシ系ではない人びとを含む多民族国家としてのロシアが前提となるケースに限って登場する²⁴⁾。人間の思考とその言語は相関関係にあるため、ロシア人が自分たちこそを「ルシ」とアイデンティファイし、心情的に「ルシ」と「ロシア」を一体化させてきた傾向にあることがこの現象と表裏をなしているだろう。

次に、英語での表記について考えてみたい。名詞では「ルシ *Rus'*」と「ロシア *Russia*」が区別されるにも関わらず、形容詞になると同形の「*Russian*」になる。ロシア語での問題がそのまま移植されたのであろう（他の西欧諸語においても似た状況が認識されるのではないか）。英語による著作物は幅広い読者層が想定されるだけに、ロシア語での表記以上に誤解を呼ぶ可能性をはらむ²⁵⁾。

誤解や混同の可能性を排するため、形容詞表現に慎重な書き手もいる。「ルシ *Rus'*」に対応する形容詞として「*Russian*」ではなく「*Rusian*」や「*Rus'ian*」を用いるのである（この場合、発音は「*rʌʃən*」ではなく「*ru:ʃən*」となるであろう）²⁶⁾。このような表記が今後主流となるかは、注視したいところだ。現段階では「ルシ *Rus'*」に対応する形容詞として「*Russian*」を避ける場合、そのまま「*Rus'*」の形で使われることのほうが多い（*Rus' people*, *Rus' principalities* など）²⁷⁾。

その一方で、英語においては、ポーランド・リトアニアを構成したルシ地域をロシアと区別するためにラテン語名称の「ルテニア *Ruthenia*」(形容詞形は *Ruthenian*) が好んで使われてきた²⁸⁾。

「ルテニア」は、しかし、一般的には近世ポーランド・リトアニアのルシ、またハブスブルク支配下のルシンには適用されるものの、古ルシを指すのには使われず、「ルシ」と完全に互換的なものではない。

英語での表記においては統一されたルールはなく、研究者各人や学会誌ごとにゆだねられているのが現状である。

最後に、日本語での状況を確認しておこう。

近世ポーランド・リトアニア支配下の東スラヴに対する呼び名は、英語と同様、日本語でも二通りである。「ルシ（ルーシ）」、あるいは「ルテニア」と表記され、前者が一般的である。「ルテニア」という表記は遅くとも 1970 年代の終わりには日本でも使われるようになった²⁹⁾が、定着には至っていない。

ラテン語の「ルテニア」よりも原語主義をとって「ルシ」と表記するほうがのぞましいというのには一理ある。しかし敢えて「ルテニア」を選択するのもまた合理的な理由がある。

英語における状況と比較すれば日本語のカナ表記における「ルシ」「ロシア」の区別は明確で（形容詞的に使う際にもそれぞれ「ルシの」「ロシアの」とすればよい）、混同を避けるために英語圏の研究者が凝らしているような工夫は必要ないであろう。だがその一方で、日本では、「ルシ」と聞いて 14 世紀以降ポーランドとリトアニアの支配下に入った地域が想起されることはまずない。ルシの中心であるキエフが 14 世紀後半から 17 世紀半ばまでリトアニアとポーランドにあったことは看過されがちで、古ルシの世界からモスクワ・ロシアへとワープしてしまうのが通常である。19 世紀にロシア帝国で構築され、ソ連期を経て現在のロシアにおいても健在である伝統的なロシア史のレトリックが日本でよく知られていることにその原因がある。

「ルテニア」を選択する利点は、単純に、読み手のうちに刷り込まれた（ロシアのプレヒストリーとしての）「ルシ」のイメージとは異なる何かを提示できることである。「ルテニア」を用いるときには定義を明確に示すことがその都度求められるが、定義をあらかじめ示すことで誤解や混乱を回避できる³⁰⁾。

おわりに

以上、歴史叙述における表記の問題とも密接に関わる「ルシ」の問題について概観した。

「歴史的ポーランド」と「ルシ世界／全ルシ」が重なりあうこの境界地域をめぐる東と西の競合は、ウクライナ（やベラルーシ）をロシアとの間の緩衝地帯として確保するというヨーロッパにとっての安全保障上の重要課題も相まって終わりが見えない。

ポーランドは、ルシの地がヨーロッパ文明に内在することを歴史的に主張する一方、長期的なモンゴル支配を経験し巨大ユーラシア国家へと発展したロシアを「ルシ」から排除してきた。

「ルシ」は、歴史的ポーランド、ひいてはヨーロッパをこそ構成するものなのである。

一方のロシアでは、ロシアとベラルーシとウクライナが別々のネーションであることを認めつつ、全東スラヴを包摂するより高次の「ルシ」という共同体(想像上のプロト・ネーション)への確信が、現在も多くの人びとに共有されている。

そのロシアにとって、「ルシ世界/全ルシ」の解体は、キエフ・ルシを母胎とみるその国史の叙述をも揺るがしかねない。ルシ世界の一体性を信じる限り、ロシアはキエフが自らの掌中からこぼれ出るのを見過ごせない。フィン=ウゴル的、モンゴルの、テュルク的要素も多く混在するモスクワ・ロシアにおいて、スラヴの要素は相対的に希薄であった。しかしロシアの自らのルシ性、スラヴ性に対する神聖視は、(ヨーロッパの人びとが古代ギリシアに自分たちの文明の源を求めることにも似て)一種の幻想としての面を持ちながらも規範となっているのだ。

「ウクライナ危機」³⁰⁾の下地には、「ルシ」概念がはらむこのような矛盾が横たわる。親欧米政権の誕生は、ロシアの目には「ルシ世界/全ルシ」の分断工作として、ヨーロッパの目には、ルシのあるべき場所への回帰、と映る。そして我々にとって「ウクライナ危機」は、主にロシアのプリズムを通して理解されることの多い「ルシ」の再考をうながす機会となっている。

注

- 1) 歴史解釈としての「ルシ世界」はミハイル・ポゴージンによって構築されたとされる [ブワホフスカ 2013 : 4-5]。
- 2) 「ルシ」が指した対象と中世の各言語でのヴァリエーションについては [栗生沢 2015 : 65-81] と [Danylenko 2004] を参照。
- 3) リトアニア大公国をルシ国家であると主張したのは歴史家ニコライ・ウストリャーロフであった。この主張はポーランド分割を正当化する役割も担っていた [ブワホフスカ 2013 : pp. 8-11]。邦語訳で読めるヴェルナツキーの著作においても、西方のルシを領有したリトアニア大公国がモスクワ公国に比肩するルシ国家とみなされたことがうかがわれる [ヴェルナツキー 1999]。
- 4) 「黒ルシ」については定義が一定しないが、ここではポーランドの地名辞典にしたがってピンスク地方としておく [Słownik geograficzny, T.8 1887: 677]。
- 5) 白海(エーゲ海)、黒海、紅海、またロシア北部の(バレンツ海の属海である)白海など、ヨーロッパとその近辺には色のついた地名がほかにもある。それらの由来と多色のルシとの関連性については未確認。
- 6) とはいえ、現在も、ポーランドとベラルーシの国境沿いの地域に「Bialo-」「Biały」(白)のつく地名が数多く残るように、ポーランドとウクライナの国境沿いには「Czerwono-」(赤)のつく地名が集中的に残っており、かつて「白ルシ」や「赤ルシ」と呼ばれた土地である名残をとどめる。
- 7) 1897年の国政調査においても、「ルシ民族」の内訳が「大ルシ」「小ルシ」「白ルシ」とされている [http://demoscope.ru/weekly/ssp/rus_lan_97.php, 2017年5月5日閲覧]。
- 8) ロシア帝国での「小ルシ(小ロシア)」は現在のウクライナの中心部分を構成するものの、全領域はカバーしていない。例えば現在のウクライナ西部は当時ハプスブルク領のガリツィアまたは上ハンガリーにあり、また同じロシア帝国内にあった現在のウクライナ東部および南部は「小ロシア」ではなく「ノヴォロシア(新ロシア)」と呼ばれ、異なる行政区域を成した。
- 9) キエフからさらに東方へゆくと、名目上はポーランドに属しながらもその行政が行き届かない、遊牧

民族の跋扈するステップ地帯が広がり、「荒野 (Dzikie Pola)」と呼ばれた。キエフが(往年の輝きを取り戻すまではゆかなかつたにせよ)再びその重要性を高めるのは17世紀に入ってからで、カトリックに押された正教会がコサックからの庇護に活路を見出し、正教の文化・文芸の拠点が西部のリヴィウやヴィルニユスからキエフに移ったことによる。

- 10) ポーランドの亡命歴史家ヨアヒム・レヴェルはフィン＝ウゴル系の土地に建てられたモスクワ国家をスラヴともルシともみなさず、またモンゴル帝国の構成員であったことからヨーロッパからも隔絶されたものと位置づける [ブワホフスカ 2013 : 11-13]。パン・スラヴ主義がポーランドで影響力を持たなかった原因として、同じスラヴとしてロシアと一緒にカテゴライズされることに抵抗感が持たれたことが指摘されている。 [Miller 1914 : 884]
- 11) やがて「恒久和平条約」(1868年)によって追認される。分割前のポーランドにとって最大の領土的損失であった。
- 12) 初期には、ルシ諸公国のうち最西端にあったハリチ公国が支配したドニステル下流域もまた「ウクライナ」と呼ばれたが、こちらは定着することなく、やがてもっぱらドニプロ沿岸地域を指す言葉となった [Wilczyński 2010 : 245]。
- 13) ポーランドにおいて「ウクライナ」が意味したのは、もともとはキエフ県のドニプロ右岸にブラツラフ県を加えた範囲であり、17世紀前半になって(ドニプロ左岸の)チェルニゴフ県がさらに含まれるようになった [Боплан 2012: 53]
- 14) ロシア革命後にウクライナに成立した自治政府(1917-18年)。独立宣言を発したがポリシェヴィキと対立し、ドイツに歩み寄るも支配体制の確立に失敗し解体した。
- 15) 全10巻からなる大作『ウクライナ・ルシの歴史』はカナダ・ウクライナ研究所 (Canadian Institute of Ukrainian Studies) による英訳プロジェクトが進行中で、すでに大部分が刊行されている [http://www.ciuspress.com/authors/62/mykhailo-hrushevsky, 2017年5月6日閲覧]。ウクライナではしばしば、「ウクライナ」が「郷土 *kraina*」という意味を持ち合わせたことが強調される。
- 16) カルパト＝ルシのうち現在ウクライナ領にいる「フツリ」はやや特殊な状況にある。ウクライナは「フツリ」をウクライナ人のサブ・グループと規定している(ウクライナでは、他国領に居住するものも含めカルパト＝ルシ全体をウクライナ人のサブ・グループとみる傾向が強い)。
- 17) 山地のルシは、リヴィウとプシエミシル(ガリツィア)、またムカチェヴォとプレシヨフ(上ハンガリー)の主教座管区が管轄する合同教会(東方カトリック教会)に属していた。
- 18) ポーランドのナショナリズム運動とロシア帝国西部諸県での宗派政策については [青島 2015] に詳しい。
- 19) この教会の成立については [福嶋 2015] に詳しい。
- 20) ロシア帝国領のウクライナでは正教徒が圧倒的多数を占め、合同教会に属したのは主にベラルーシ農民であったため。ウクライナの合同教会信徒はポーランド分割後はオーストリア領に入っていた。
- 21) ウクライナ農民がポーランド領主の影響下で「大ルシ」的規範から外れた独自の文化を育むことが危険視されるようになった。ロシア領ウクライナでは合同教会の脅威はなかったもの、比較的早くに文章語として成立したウクライナ語が統制の対象となり(「ヴァルーエフ指令」「エムス法」)、さらにウクライナ・ナショナリズムを主張する団体(「キュリロス＝メトディオス団」や「フロマダ」)が弾圧された [Ploky 2016 : 166-170] [中井 1998 : 5-21]。
- 22) ポーランドの影響を強く受けてきた合同教会を批判する「モスコフィル」は正教会に親和的で、正教改宗に至るケースも多かった。ロシアからも、出版物や人的交流を介してガリツィアのルシをロシア正教へといざなう働きかけが展開された [Osadczy 2007 : 376-391]。
- 23) 近世ポーランド・リトアニア領のルシ地域を研究対象とするロシアの研究者の間には(モスクワ・ロシアとの混同を避けるために)「ルシの *русский*」の表記をとらず、「西ルシの *западнорусский*」と書く傾向もみられる。また、ドミトリエフの場合は、地域については「ウクライナ、ベラルーシの *украинско-белорусский*」という形容詞を用いる一方、人びとについては慎重を期して(エスニックな帰属ではなく)正教徒という宗派的帰属をもって呼ぶ(例：ポーランド・リトアニアの正教徒たち) [Дмитриев

- 2003]。
- 24) 「ルースキー」と「ロシースキー (ラシースキー)」については [高田 2012 : 155-169] を参照。
- 25) 英語から日本語に翻訳するときには、状況に応じて Russian を「ロシアの」「ルシの」と訳し分ける必要が生じる [フェネル 2017 : 8]。
- 26) Rusian の例はスナイダー [Snyder 2003 : 24]、Rus'ian の例は、プロヒー [Plokyh 2006: 93] の著作にみられる。
- 27) 代表的なところでは、英語でウクライナの通史を発表しているマゴーチ [Magocsi 1996] やプロヒー [Plokyh 2016]、また近現代を中心にウクライナ史を描くウィルソン [Wilson 2000] がこのスタイルを取っている。彼らは Rus (Rus') (古ルシ)、Ruthenia (近世)、Ukraine (近現代) を使い分ける点で共通している。他方、同じくウクライナの通史を書いたズプテルニーに特徴的なのは、近代ウクライナ・ネイション形成前の言語や文化を Old Ukrainian と表現する点である [Subtelny 1988]。このような現行のネイションを基準とする表現も珍しくはない (ベラルーシについても同様)。
- 28) 英語圏でのウクライナ研究において大きな権威をもつ *Journal of Ukrainian Studies* (Canadian Institute of Ukrainian Studies, 1976-) や *Harvard Ukrainian Studies* (Harvard Ukrainian Research Institute, 1977-) において使われている。
- 29) 中近世ポーランドの「ルシ県」が「ルテニア」と表記される [森安 1978: 405]。また、同著者によって「ルテニア」がより広義 (ポーランド・リトアニア領の正教圏) に使用される例もみられる [森安 1991 : 186-189]。
- 30) 「ルテニア」を用いる際に唯一注意しなければならないのは、近世ポーランド・リトアニアとポーランド分割後のガリツィアとでは、ルテニアが指す対象に食い違いが生じる点である。
- 31) 「ウクライナ危機」について、政治・外交にとどまらず領域横断的に語った対談を参照 [塩川、沼野 2014]。

参考文献

青島陽子 2015

「ロシア帝国の「宗派工学」にみる帝国統治のパラダイム」池田嘉郎、草野佳矢子 (編) 『国制史は躍動する：ヨーロッパとロシアの対話』刀水書房 : pp.121-157

伊東孝之、井内敏夫、中井和夫 (編) 1998

『ポーランド・ウクライナ・バルト史』山川出版社

ヴェルナツキー 1999

『東西ロシアの黎明：モスクワ公国とリトアニア公国』風行社 (松木栄三訳)

京都市美術館 (編) 2001

『レオナルド・ダ・ヴィンチ《白貂を抱く貴婦人》：チャルトリスキ・コレクション展』ブレーントラスト

栗生沢猛夫 2015

『『ロシア原初年代記』を読む』成文社

塩川伸明、沼野充義 2014

「ウクライナ危機の深層を読む」『現代思想』第 42 巻、第 10 号 : pp.38-63

高田和夫 2012

『ロシア帝国論：19 世紀ロシアの国家・民族・歴史』平凡社

中井和夫 1998

『ウクライナ・ナショナリズム：独立のディレンマ』東京大学出版会

早坂眞理 2013

『ベラルーシ：境界領域の歴史学』彩流社

福嶋千穂 2010

- 「ハジャチ合意(1658-59年)」にみるルテニア国家の創出『史林』第93巻、第5号：pp.31-64(633-666)
 福嶋千穂 2015
 『プレスト教会合同』(ポーランド史叢書 1) 群像社
 フェンネル、J. 2017
 『ロシア中世教会史』教文館(宮野裕訳)
 ブワホフスカ、カタジナ 2013
 「歴史をめぐる論争／同時代をめぐる論争：19世紀のロシアとポーランドの歴史家の解釈にみる旧リトアニア大公国領」『東欧史研究』第35号：pp.3-23 (小山哲訳)
 森安達也 1978
 『キリスト教史 III』(世界宗教史叢書 3) 山川出版社
 森安達也 1991
 『東方キリスト教の世界』山川出版社
 Chlebowski, Bronisław; Walewski, Władysław (red.) 1887
Słownik geograficzny Królestwa Polskiego i innych krajów słowiańskich, Warszawa, T.8.
 Danylenko, Andrii 2004
 “The name "Rus". In search of a new dimension”, *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas*, Neue Folge, Bd. 52, H. 1 : pp. 1-32.
 Kappeler, Andreas 2003
 “Mazepintsy, Malorossy, Khokhly: Ukrainians in the Ethnic Hierarchy of the Russian Empire”, Mark von Hagen, Andreas Kappeler, Zenon E. Kohut, Frank Sysyn, *Culture, Nation and Identity: The Ukrainian-Russian Encounter (1600–1945)*, Canadian Institute of Ukrainian Studies Press : pp. 162-181.
 Kuzio, Taras 2014
Theoretical and comparative perspectives on nationalism: new directions in cross-cultural and post-communist studies, Stuttgart.
 Magocsi, Paul Robert 1996
A History of Ukraine, University of Washington Press.
 Miller, Herbert Adolphus 1914
 “Nationalism in Bohemia and Poland”, *The North American Review*, V. 200, No. 709 : pp. 879-886.
 Osadczy, Włodzimierz 2007
Święta Ruś, Lublin.
 Plokhly, Serhii 2006
The Origins of the Slavic Nations: Premodern Identities in Russia, Ukraine, and Belarus, Cambridge University Press.
 Plokhly, Serhii 2016
The Gates of Europe: A History of Ukraine, Penguin Books.
 Radzik, Ryszard 2016
Rosyjski imperializm wspólnotowy, Lublin.
 Snyder, Timothy 2010
The Reconstruction of Nations: Poland, Ukraine, Lithuania, Belarus, 1569-1999, Yale University Press.
 Subtelny, Orest 1988
Ukraine: A History, University of Toronto Press.
 Świątek, Adam 2013
Lach serdeczny: Jan Matejko a Rusini, Kraków.
 Wilczyński, Włodzimierz 2010
Ukraina : Leksykon, Warszawa.

Wilson, Andrew 2000

The Ukrainians: Unexpected Nation, Yale University Press.

Боплан, Гійом Левассер де 2012

Опис України, Київ (Guillaume Le Vasseur de Beauplan, *Description D'Ukraine*, Rouen, 1660 の翻訳).

Дмитриев, М.В. 2003

Между Римом и Царьградом: Генезис Брестской церковной унии 1595-1596 гг., Москва.

